

『諸道聴耳世間狙』における演劇作品の利用について

——一之巻一「要害は間にあはぬ町人の城廓」を中心に——

王 欣

はじめに

明和三年（一七六六）出版された上田秋成の浮世草子『諸道聴耳世間狙』^①（以下、『世間狙』と略称）は短篇十五話からなる。

その『世間狙』一之巻一「要害は間にあはぬ町人の城廓」の小西三十郎の人物造形に関しては、これまでに、先行浮世草子作品や中国の白話小説、モデルとしての実在の人物、演劇作品と関連付けながら、研究が行われていた。^② また、神楽岡幼子氏が「諸道聴耳世間狙」の挿絵^③で挿絵を手掛りにし、小西三十郎と『夏祭浪花鑑』の団七との類似点を指摘している。しかし、『世間狙』一之巻一に関する検討は、今だ充分とは言いがたい。『世間狙』一之巻一の物語の展開に関して、依然として次のような問題点が残されている。

例えば、商売に無関心で、軍学を好むという特徴において、『世

間狙』一之巻一の小西三十郎が、『本朝三国志』の小西弥十郎と類似していることは、先行研究によってすでに指摘されている。^④ 『世間狙』一之巻一の小西三十郎と『本朝三国志』の小西弥十郎との共通点は、商売嫌い、武芸好みだけだろうか。さらに、「中村吉右衛門」、「富士郎」、「お初徳兵衛」というような演劇と関連ある人物の名前は、『世間狙』一之巻一の物語の展開とどのように関わっているのだろうか。右記のような問題点を解決するため、『世間狙』一之巻一と演劇作品との関連性について、再検証する必要があると思われる。

『上田秋成全集 第七巻』^⑤の解題によって、『世間狙』は明和元年十一月までに脱稿された。そして、高田衛氏の『上田秋成年譜考説』^⑥によると、上田秋成は享保十九年（一七三四）に大坂で生まれ、明和元年十一月まで一度も江戸に下ったことがなく、主な生活拠点

が上方に集中していた。

そこで、本稿においては、『世間狙』一之巻一と演劇作品との関連性を指摘した先行研究の研究成果を踏まえ、『世間狙』の開板願書が出された時期明和元年十一月までに、上方で上演された演劇作品に注目して考察を加え、『世間狙』一之巻一の物語の展開を中心に、小西三十郎の造形における演劇作品からの影響を検討し、『世間狙』一之巻一と演劇作品との関連性を究明したい。

なお、本稿では、小西三十郎が後悔を覚え、山本勘六を訪ねるために西国へ行くということを境に、『世間狙』一之巻一の内容を前半部分と後半部分に分けて考察を進めていく。

一 一之巻一の前半部分

『義太夫年表』と『歌舞伎年表』によれば、明和元年十一月までに上方で上演された、小西三十郎の名前と類似する小西弥十郎、小西弥源太をはじめとする小西一族の人物が登場する演劇作品は、淨瑠璃『本朝三國志』、『傾城枕軍談』、『山城の国畜生塚』と歌舞伎『仮名草紙国性爺実録』、『傾城勝尾寺』である。ただし、小西弥十郎の町人時代を描いた作品は淨瑠璃『本朝三國志』だけである。⑦それに、『世間狙』一之巻一の小西三十郎の商売に無関心で、軍学を好むという特徴が、『本朝三國志』の小西弥十郎と類似しているこ

『諸道聴耳世間狙』における演劇作品の利用について

とは、先行研究によってすでに指摘されている。

ところが、『世間狙』一之巻一の小西三十郎と『本朝三國志』の小西弥十郎との類似点は武芸好みだけにとどまらず、常に意見を言う友人の存在も共通している。さらに、小西三十郎も小西弥十郎も最初は友人の意見を聞き入れなかったが、挫折してから、やっと友人の意見の親切さがわかるようになる。

さて、『世間狙』一之巻一^⑧の前半部分の物語の展開は表1に示した通りである。

『世間狙』一之巻一に、小西三十郎が戎嶋へ行つて、真直ぐな針で釣りをしながら、大名が召抱えに来ることを待っているうちに、薬種問屋が潰れ、小西三十郎が堺から大坂へ行つて、小問物の担い売りになるという設定がある。こここの「真直な針」に関して、森山重雄氏はこれが太公望の故事を意識したものであると指摘した。⑨太公望の故事は『史記』だけでなく、『封神演義』でも、『通俗武王軍

【表1】

『世間狙』一之巻一の前半部分の構成	
物語の展開	小西三十郎は商売に無関心で、軍学を好む。
	兵書に夢中し、倦む日は「戎嶋の波濤へ出て真直な針で釣」をし、「目の明た大名」をか、へには来ること待つ。
	薬種問屋が潰れた小西三十郎は「堺を立退て、大坂の問物の担い売りになる。

談』でも見られる。

ここで注目したいのは、太公望の故事の「渭水」が、『世間狙』一之巻一で「戎嶋」に変えられた点である。こうした置き換えに關して、前掲の神楽岡氏の論文で、この設定が『夏祭浪花鑑』の一寸徳兵衛が堺戎嶋で団七の女房お梶に雇われる設定を意識したものであると指摘している。しかしながら、『世間狙』一之巻一で、小西三十郎が戎嶋へ釣りに行く目的は、「目の明た大名が、へには来」ることを待つのであるが、『夏祭浪花鑑』の団七の女房は身分から見れば、『世間狙』一之巻一の「大名」とは違う。

その他、『夏祭浪花鑑』の一段目には、戎嶋で団七の女房お梶に雇われた一寸徳兵衛が、玉嶋兵太夫の息子磯之丞を家に帰らせるため、自分の没落談を話す場面がある。一寸徳兵衛の没落談によれば、一寸徳兵衛はもともと太物問屋の息子であった。四十歳を過ぎて一寸徳兵衛を生んだ親は、一寸徳兵衛に謡や舞、茶の湯を習わせたものの、商売にまったく参与させなかった。それに対し、『世間狙』一之巻一の小西三十郎は「商売のかけ引は手代共がいますれば。拙者が仕るにおよば」ないと考え、商売に關心を持っていない。つまり、商売に關心がない理由において、『夏祭浪花鑑』の一寸徳兵衛は『世間狙』一之巻一の小西三十郎と異なる。

以上、見てきたように、『夏祭浪花鑑』で一寸徳兵衛を雇う団七

の女房お梶は身分から見れば、『世間狙』一之巻一で小西三十郎が待っている「大名」と合致していない。それに、商売に關心がない理由において、『夏祭浪花鑑』の一寸徳兵衛は『世間狙』一之巻一の小西三十郎と一致しない。故に、「戎嶋」で雇われるという共通点のほか、『夏祭浪花鑑』の一寸徳兵衛が堺戎嶋で団七の女房お梶に雇われるという設定は、『世間狙』一之巻一の小西三十郎が戎嶋へ釣りに行って、大名が召抱えに来ることを待つという場面と関連性を持っていない。

表1に示したように、物語の展開から見れば、「戎嶋へ釣りに行く」という場面は、前の場面を受けて後の場面を展開していくという重要な役割を担っている。また、小西三十郎が「戎嶋へ釣りに行く」という場面の後の場面は、小西三十郎が堺から大坂へ行って小問物の担い売りになる場面である。前掲の神楽岡氏の論文によれば、堺から大坂へ行く小西三十郎の人物造形は、『夏祭浪花鑑』の団七から影響を受けている。したがって、『世間狙』一之巻一の小西三十郎が「戎嶋へ釣りに行く」という場面も『夏祭浪花鑑』から影響を受けていることが考えられる。『夏祭浪花鑑』で「戎嶋」は「戎嶋のお鯛茶屋」を指している。さらに、『夏祭浪花鑑』で、「戎嶋のお鯛茶屋」は、「玉嶋兵太夫殿子息。同名磯之丞殿。明暮是に居」り、「傾城あつめてどら打」つ場所である。即ち『夏祭浪花鑑』で、

「戎嶋」は傾城がいる色茶屋を暗示している。『世間狙』一之巻一が、『夏祭浪花鑑』から影響を受け、一之巻一の「戎嶋」も、「傾城がいる色茶屋」を暗示していることは想定できる。また、『本朝三国志』で、小西弥十郎は小磯がいる揚屋高島屋に通っている。ここでも「色茶屋」が登場している。

『本朝三国志』の四段目において、小磯がいる揚屋で、小西弥十郎は加藤正清に刀を渡され、召抱えられる。『本朝三国志』で、加藤正清は大名として設定されている。そのため、『世間狙』一之巻一の小西三十郎が「俺む日はいつも戎嶋の波濤へ出て真直な針で釣をたれ。此針に魚のかかる時こそ目の明た大名がか、へには」来ることを待つという場面が、『本朝三国志』の小西弥十郎が小磯のいる揚屋で大名加藤正清に召抱えられるという設定を意識しているものだと認められる。

以上の考察から、『世間狙』一之巻一の前半部分で、小西三十郎が真直な針で釣りをする場面は太公望の故事と類似しているが、「戎嶋」、「大名に召抱えられる」という設定を考えれば、小西三十郎の「戎嶋へ釣りに行く」という場面は、太公望の故事だけでなく、前述したように、浄瑠璃『本朝三国志』の小西弥十郎が揚屋高島屋で大名加藤正清に召抱えられるという設定とも関連していると言えるよう。

二 一之巻一の後半部分

前掲の神楽岡氏の論文によると、『世間狙』一之巻一の後半部分の展開が、『夏祭浪花鑑』四段目の清七が田舎侍と傳八に騙される展開と類似している。

しかし、小西三十郎と山本勘六は友人であるが、『夏祭浪花鑑』の清七と傳八は親しくもない、同じ道具屋で働いているごく普通の同僚である。小西三十郎は自分の生活上の困難を解決するため山本勘六に助けを頼むのに対し、清七は傳八らが作った罠に陥り、ただ自分の面目を立てるため、傳八が貸してくれる五十両を受け取る。つまり、人物関係や事件の起因において、『世間狙』一之巻一の後半部分は『夏祭浪花鑑』の四段目と完全に異なるのである。

『世間狙』一之巻一の後半部分の小西三十郎が友人の山本勘六に騙される場面は、読み手に「曾根崎心中」の物語の展開を想起させる。しかし、『曾根崎心中』と『世間狙』一之巻一においては、登場人物同士の立場が異なる。『曾根崎心中』で、徳兵衛は継母から結納金を取り返したが、どうしても金が必要という友人九平次に三日限りの約束でその金を貸したという場面が見られる。徳兵衛は友人九平次を助けるため、九平次にお金を貸す。一方、『世間狙』一之巻一で、小西三十郎は友人山本勘六に助けられ、商売を再開する。

即ち、『曾根崎心中』の徳兵衛は友人を助ける立場であるが、『世間狙』一之巻一の小西三十郎は友人に助けられる立場である。『曾根崎心中』の徳兵衛の立場は『世間狙』一之巻一の小西三十郎の立場と一致しない。

『世間狙』一之巻一に、小西三十郎は女中たちに「ちと富十郎がお初徳兵衛をして見せさしやれと、せがまれて天窓をか」く場面がある。ここで注目したいのは、歌舞伎役者「富十郎」が「お初徳兵衛」と関連付けられている点である。『歌舞伎年表』と『歌舞伎評判記集成』によれば、中村富十郎がお初を演じた歌舞伎『女夫星浮名天神』は、明和元年十一月までに上方で二回上演された。最初は元文二年（一七三七）十一月二十二日より大坂岩井座で上演された。その後、宝暦十一年（一七六一）八月十四日に大坂中山文七座で上演された。

『女夫星浮名天神』の台本は現存しないが、『歌舞伎評判記集成』からその内容の推定が可能である。宝暦十二年（一七六二）正月の『役者年越草』に、「徳兵衛は元ン来武士の種にて。故有て町人と成。其上おはつといへる女良になづみ。金に手づまり。預りの日蓮のまんだらはすりかへられ」という内容がある。さらに、元文三年（一七三八）三月の『役者紋楊柳』に、『女夫星浮名天神』の上演内容に関するより詳しい記録が残されているため、元文三年三月に出

版された『役者紋楊柳』での『女夫星浮名天神』に登場した各役者への評判を整理し、『女夫星浮名天神』の主な登場人物を『曾根崎心中』、『曾根崎模様』と比較する内容を表2、表3にまとめる。

表2、表3に示したように、『女夫星浮名天神』の主な登場人物は、おはつ徳兵衛の周囲へと拡大されている。おはつの兄傳右衛門、徳兵衛の兄重助が登場し、松田幸右衛門が九平次と共に敵役となり、重助と幸右衛門はともに播磨の家中と設定されている。このことにより、御家騒動の内容と結び付けられる。土田衛氏の『考証元禄歌舞伎―様式と展開―』では、観音廻り以下『女夫星浮名天神』において設定された殆どの内容が、宝暦十一年五月の豊竹座の『曾根崎模様』に含まれていると指摘されている。その上、表2、表3に示したお初徳兵衛と関連ある登場人物から見れば、『女夫星浮名天神』の配役は『曾根崎模様』の配役とはほぼ一致している。

『曾根崎模様』の生玉の段で、徳兵衛が九平次に騙される内容の展開は左記の通りである。

① 伯父に拵料三拾両を返すため、徳兵衛は友人九平次に質物として掛物渡唐の天神を預け、金三拾両を借りる。

② 掛物渡唐の天神を急いでお初の兄三ぶ六に渡すため、徳兵衛は九平次から掛物渡唐の天神を取り戻す。徳兵衛は掛物の代わりに九平次に返すべきお金がないので、金証文を書き、九平次

【表2】 徳兵衛と関連する登場人物

「曾根崎心中」 平野屋の主人（徳兵衛の叔父）	「女夫星浮名天神」 平野屋久右衛門（徳兵衛の伯父）	「曾根崎模様」 平野屋久右衛門（徳兵衛の伯父）
平野屋醬油衛持長藏	平野屋醬油衛持長藏	平野屋醬油衛持長藏
	平野屋下女おたね・長藏の女房	平野屋下女おたね・長藏の女房
叔父の内儀の姪	平野屋久右衛門の姪おきた	伯父の内儀の姪お北
徳兵衛の在所の継母		
平野屋の徳兵衛	平野屋の徳兵衛	平野屋の徳兵衛
	徳兵衛の兄、播磨の家中 間野重助	徳兵衛の兄、侍長右衛門
	野間重助女房お高	長右衛門女房お絹
	重助の下人戸田与五兵衛	長右衛門の家来与五助
	主君の姫君	今出川家のお姫様
	播磨の家中松田幸右衛門	侍片岡幸右衛門
	松田幸右衛門の奴時藏	片岡幸右衛門の家来土手助
油屋九平次	油屋九平次	油屋九平次

【表3】 おはつと関連する登場人物

「曾根崎心中」 天満屋のお初	「女夫星浮名天神」 天満屋のお初	「曾根崎模様」 天満屋のお初
	お初の兄黒星の傳右衛門	お初の兄三ぶ六
	お初の弟盲目左傳	
天満屋の小春	天満屋の小春	天満屋の小春

『諸道聴耳世間狂』における演劇作品の利用について

に渡す。しかし、徳兵衛は九平次に騙され、偽物の掛物をもらう。質物の掛物渡唐の天神が取り戻されなかっただけでなく、徳兵衛は三十両の借金を背負うことになる。

③ 徳兵衛は恨みを晴らそうとして、九平次を狙うが、却って九平次ら三人に打たれる。

なお、元文三年三月に出版された『役者紋楊柳』での、「女夫星浮名天神」の生玉蓮池の段に登場した役者の演技への評判は左記の通りである。

嵐三十郎 岩井座

【評判頭曰】是も御当地はなれぬ名代の金貝。常矢八三四五本宛。当替浮名天神に。徳兵へ兄間野重内（重内）の役。父重之右衛門が名跡へ帰省し。主君の姫君大坂逗留の見物。生玉へ迎ひに来り。傍輩幸右衛門徳兵へに金卅両かり、手形に判おし。其印判は廿五日に落せしをひろひ取り。廿九日のにせ手形と逆ねだりを。
（中略）

岩井半四郎 座本

【評判頭曰】是もおなじみ。八十そこの金貝。只みせより続いての束穴。銀主のお悦びと。存る。此度ひらのや徳兵への役。生玉にて浄るりに合せて。おはつが兄。黒星の傳右衛門の。日蓮のまんだらをせがまれ。請て戻さんと。幸右衛門に金子をせ

がめば。覚なきと逆ねだりせられ。証拠に成べき筋共ちがひな
んぎするを。九平次男づくとして。質に取しまんだらを戻すを悦
び。封のま、受取帰り。にせ物なりと大勢に打擲せられ、池へ
ははめられ。(中略)

沢村宗五郎

岩井座

評判頭取云 此度浮名天神に。お初が兄黒星の傳右衛門と成。

日蓮の正筆を。弟盲目左傳盗出し。あねおはつにやりしと聞。

生玉にて徳兵へはつに出合。博奕のせりふおかし。(中略)

村山平十郎

岩井座

喜助いはく 此度油屋九平次と成。河伊播四なといふ悪者と連

立山寺の謡の出徳兵へ生玉にてなんぎを見。頼もし貞にて。質

に取りしまんだらを取りにやり。金なしに似せ物をもどしあら

はれしを。逆ねだりして。打擲せらる、所にくし。(中略)

中村富十郎

岩井座

頭取いはく (中略) 此度おはつと成。生玉にて浄るりに合せ

て思入。(中略)

春山歌五郎

岩井座

大尽いはく 此度平野や久右衛門姪おきたと成。徳兵衛が。嫌

ふ故。在所へ行しを。(中略)

岩田幾松

岩井座

大尽いはく此度おはつが弟。盲目左傳と成。兄傳右衛門にせつ
かんにあひ。徳兵へがなんぎを。きのどくがらる、仕内よし

(『役者紋楊榎』(傍線引用者)¹⁵⁾

ここで宝暦十二年正月の『役者年越草』での『女夫星浮名天神』
に関する記録及び元文三年三月の『役者紋楊榎』での『女夫星浮名
天神』に登場した各役者への評判、浄瑠璃『曾根崎模様』の生玉の
段の展開を参照し、『女夫星浮名天神』の生玉蓮池の段の展開を推
定する。

『女夫星浮名天神』の生玉蓮池の段

お初の盲目の弟左傳が日蓮の曼陀羅を盗み出し、お初にやる。お
初はその日蓮の曼陀羅を徳兵衛の所に預ける。徳兵衛は伯父平野屋
久右衛門の姪おきたとの縁談が嫌なので、伯父がおきたの家に渡し
た持料三十両を返すため、友人油屋九平次に日蓮の曼陀羅を預け、
金三十両を借りる。ところが、生玉でお初の兄黒星の傳右衛門と出
会い、傳右衛門にはやく日蓮の曼陀羅を返してほしいと言われたの
で、徳兵衛は手形を持ち、幸右衛門に前貸した金三十両の返還を求
めるが、幸右衛門は印判が二十五日に落とし、徳兵衛が持っている
二十九日の手形が偽物だと言って、逆ねじをする。仕方なく、徳兵
衛はまた九平次に助けを求める。徳兵衛の難儀を見て、油屋九平次
は質物の日蓮の曼陀羅を徳兵衛に返し、お金の代わりに徳兵衛に金

証文を書いてもらう。徳兵衛は封のまま日蓮の曼陀羅を持って帰る。しかし、お初の兄傳右衛門に、九平次から取り戻した日蓮の曼陀羅が偽物だと言われる。徳兵衛は九平次に会いに行き、偽物の日蓮の曼陀羅をくれた九平次を責めるが、かえって九平次に打たれ、蓮池へはめる。

『女夫星浮名天神』の生玉蓮池の段の徳兵衛を『世間狙』一之卷一の小西三十郎と比較してみると、徳兵衛と九平次は友人であり、小西三十郎と山本勘六も友人である。その他、徳兵衛も小西三十郎も自分の生活上の困難を解決するため、自ら友人に助けを求める。それに、徳兵衛は九平次に騙され、日蓮の曼陀羅が取り戻されなかっただけでなく、三十両の借金まで背負うことになる。この設定も小西三十郎が山本勘六に三割の口銭を取られ、商売の利益がないだけでなく、損失まで出てくるという設定と類似している。最後、二人とも友人への復讐を果そうとするが、結果として、二人とも失敗し、却って打たれる。

さらに、宝暦十二年（一七六二）正月の『役者年越草』で、「徳兵衛は元ン来武士の種にて。故有て町人と成」という記述が見られる。『女夫星浮名天神』の徳兵衛が武士の後裔であるという設定も、『世間狙』一之卷一の小西三十郎が小西撰津守の後裔であるという設定と合致している。

『世間狙』一之卷一の後半部分の小西三十郎が山本勘六に騙される内容に関して、高田衛氏は『上田秋成研究序説』^⑤で、この部分の内容と『警世通言』第十七話又は『今古奇観』第二十二話の「鈍秀才一朝交泰」との類似性を指摘した。

其中更有兩個人奉承得要緊（中略）一個叫黃勝、綽號黃病鬼、一個叫顧祥（中略）馬德稱哀戚盡禮、此心無窮、却被有司逢迎上意、逼要萬兩脏銀交納、此時只得變賣家產（中略）又有古董書籍等項約數百金、寄與黃勝家中（中略）過了歲餘、馬德稱往黃勝家索取寄頓物件、連走數次、俱不相接、結末遣人送一封帖來、馬德稱拆開看時、沒有書柬、止封帳目一紙、內開某月某日某事、用銀若干、某該合認某該獨認、如此非一次、隨將古董書籍等項、估計扣除、不還一件、徳稱大怒、當了來人之面將帳目扯碎、大罵一場、這狀狗彘之輩、再休相見、從此親事亦不提起

（『警世通言』第十七卷「鈍秀才一朝交泰」（開み線引用者）^⑦）
ところが、『鈍秀才一朝交泰』^⑥の内容を、『世間狙』一之卷一の後半部分の小西三十郎が山本勘六に騙される内容と比較してみれば、馬德称と黄勝が友人であり、小西三十郎と山本勘六も友人である。馬德称は小西三十郎と同じ、自分の生活上の困難を解決するため、友人に助けを求めるが、友人に騙される。しかし、馬德称は友人に

騙され、失ったものはただ友人に預けた金品だけで、それ以上の損失がない。それは『世間狙』一之巻一の小西三十郎が山本勘六に三割の口銭を取られ、商売の利益がないだけでなく、損失まで出てくるといふ設定と異なる。また、友人に騙された馬徳称は、友人に復讐するつもりがなく、その後友人と会わなくなる。それも『世間狙』一之巻一の小西三十郎の復讐と符合しない。

その他、小西三十郎が山本勘六への復讐に関して、高田衛氏は『上田秋成研究序説』で、これが『初刻拍案驚奇』第二十二話又は『今古奇観』第四十話の「淫多財白丁横帯」を利用したものだとしている。

守他出來時、當街叫喊、州牧坐在轎上問道、是何人叫喊、七郎口裡高聲答道、是橫州刺史郭翰、州牧道、有何憑據、七郎道、

原有告身、被大風飄舟、失在江裡了、州牧道、既無憑據、知你是真是假、就是真的、賣發已過、如何只管在此纏擾、必是光棍、姑饒打、快走

（『初刻拍案驚奇』卷二十二「錢多處白丁横帯」）

運退時刺史當稱

しかし、「錢多處白丁横帯 運退時刺史當稱」^⑩で、七郎と零陵州の知事とは見知らぬ仲で、零陵州の知事が再び七郎と会わない理由は、七郎が自分の身分を証明することが出来ないからである。この

【表4】『世間狙』一之巻一の後半部分の小西三十郎の人物造形と諸作品との関連性

	「世間狙」 （小西三十郎）	「夏祭浪花鑑」 （清七）	「曾根崎心中」 （徳兵衛）	「女夫星浮名天神」 （徳兵衛）	「鈍秀才朝交」 （泰（馬徳称））
武士の後裔がある	○	×	×	○	×
自分に困難がある	○	△（*）	×	○	○
人に助けを求める	○	×	×	○	○
友人がいる	○	×	○	○	○
人に騙される	○	○	○	○	○
元も子もない	○	○	×	○	×
復讐する	○	○	○	○	×

（*）『夏祭浪花鑑』で、もともと清七の生活上何の困難もないが、自分と関係ない田舎武士のことで、清七が自分の面目を立てるため弥市と争い、金五十両が必要になる。

ように、七郎と零陵州の知事との関係は、『世間狙』一之巻一の小西三十郎と山本勘六との関係と何の類似性も持っていないと考えられる。

上述した内容をまとめ、『世間狙』一之巻一の後半部分の小西三十郎の人物造形と諸作品との関連性を整理する。

表4に示したように、『夏祭浪花鑑』、『曾根崎心中』、『鈍秀才一朝交泰』より、『女夫星浮名天神』の徳兵衛が九平次に騙され、九平次を責める場面は、物語の展開及び人物の設定において、『世間

狙』一之巻一の後半部分の小西三十郎が山本勘六に騙され、復讐する場面と最も類似している。

ここで『世間狙』一之巻一の前半部分の最後の小西三十郎が役者の物真似をしながら、得意先をまわる場面について述べる。この部分で、「吉右衛門」の名前が出てくる。『世間狙』の開板願書が出された明和元年十一月に近い、宝暦十三年正月の『役者籤宮』でも、宝暦十三年三月の『役者吉野山』でも、極上上吉の立役として中村吉右衛門の獅子吼が好評を博した。それに、宝暦十四年正月の『役者初庚申』で、中村吉右衛門が演じた熊谷の次郎も好評だった。宝暦十四年三月の『役者今川状』で、中村吉右衛門が演じた『極彩色娘扇』の志村はいとが好評で、吉右衛門が「正真のめいじん」であると評判された。その他、森山重雄氏も『上田秋成初期浮世草子評釈』で、中村吉右衛門が武道事が得意であると指摘している。小西三十郎の武芸好きが、中村吉右衛門の名人芸「武道事」と共通している。また、『世間狙』一之巻一の前半部分で、小西三十郎の造形に影響を与えている『本朝三國志』の小西弥十郎も、『夏祭浪花鑑』の団七も腕立自慢である。故に、ここの小西三十郎が中村吉右衛門のまねをする部分は、『世間狙』一之巻一の前半部分の内容と繋がっている。

一方、小西三十郎が役者の物真似をする部分の「富十郎がお初徳

『諸道聴耳世間狙』における演劇作品の利用について

兵衛」という設定が、『世間狙』一之巻一の後半部分の典故である『女夫星浮名天神』を示唆していることは先の考察でわかった。

ところで、『世間狙』一之巻一の後半部分で、小西三十郎の復讐の最後の場面に出てくる「晋の豫讓」に関して、森山重雄氏は『上田秋成初期浮世草子評釈』で、「中国の戦国時代の人。主人智伯の仇を復せんとして仇の襄子に捕えられ、その衣を乞いて、それを刺し、自刃す」と指摘している。その他、『史記』卷八十六、刺客列傳第二十六にも「襄子大義之、乃使使持衣與豫讓、豫讓拔劍三躍而擊之、曰吾可以下報智伯矣、遂伏劍自殺」という記録が残されている。

『史記』での記録によれば、豫讓は主人智伯の仇を復そうとして、襄子からもらった衣服を剣で刺してから、自殺した。豫讓が剣で襄子の衣服を刺すのとは異なり、『世間狙』一之巻一の後半部分で、小西三十郎は山本勘六の着替えを引き裂くのである。

こは狼籍者と取まく家来をさんぐくに打ちらせば。残りしは乗物と著替ばかり。智伯にあらぬ琥珀の羽織せめては是をとずんぐに引さきしは晋の豫讓が思ひ入れ。

(『世間狙』一之巻一)

衣服を引き裂く場面は『夏祭浪花鑑』の八段目でも見られる。

『夏祭浪花鑑』の三段目に、一寸徳兵衛と団七が友情を象徴する片

袖を交わす場面がある。さらに、『夏祭浪花鑑』の八段目で、団七は、一寸徳兵衛が自分から妻を奪おうとしていると誤解し、二人の友情を象徴する一寸徳兵衛からもらった片袖を取り出し、引き裂く場面が見られる。

九郎兵衛は袂より。取交したる片袖出し ずんぐくに引裂けは。

徳兵衛も持合せ俱に引裂き一度に投付。互の固を破たからは心は残らぬ。
 (『夏祭浪花鑑』八段目)

『夏祭浪花鑑』の八段目で、団七が一寸徳兵衛からもらった片袖を引き裂くことは、二人の友情の徹底的破壊を意味している。『世間狙』一之巻一の後半部分にもこの趣向が取り入れられ、「片袖」の代わりに山本勘六の着替えが小西三十郎に引き裂かれ、小西三十郎のこの行動も、山本勘六との友情の徹底的破壊を暗示していると考えられる。

以上の検討をまとめてみると、『世間狙』一之巻一の前半部分の最後にある、小西三十郎が役者の物まねをする場面で見られる「吉右衛門の物まね」は、前半部分の小西三十郎の武芸好みだけでなく、前半部分の典拠である浄瑠璃『本朝三国志』の小西弥十郎、『夏祭浪花鑑』の団七の武勇とも関連している。それに、「富十郎がお初徳兵衛」という設定は、歌舞伎『女夫星浮名天神』を指している。さらに、『世間狙』一之巻一の後半部分の小西三十郎が山本勘六に

騙され、復讐しようとする展開は、歌舞伎『女夫星浮名天神』における徳兵衛が九平次に騙され、九平次を責める設定と類似している。その他、小西三十郎の復讐場面で見られる小西三十郎が山本勘六の「着替えをずんぐんに引き裂く」という場面は、『夏祭浪花鑑』の八段目からの趣向である。

このように、『世間狙』一之巻一の「富十郎がお初徳兵衛」、「着替えをずんぐんに引き裂く」という設定は、一之巻一の後半部分の典拠である『女夫星浮名天神』、『夏祭浪花鑑』を示唆していると言えよう。

まとめ

以上、『世間狙』一之巻一の人物造形と演劇作品との関連性を指摘した先行研究の研究成果を踏まえ、小西三十郎が後悔を覚え、山本勘六を訪ねるために西国へ行くということを境に、『世間狙』一之巻一の内容を前半部分と後半部分に分け、物語の展開を中心に、小西三十郎の人物造形と演劇作品との関連性を究明することを意図して論を進めてきた。

『世間狙』一之巻一の前半部分では、小西三十郎と『本朝三国志』の小西弥十郎が、腕立て自慢の他、友人の存在においても、友人の意見に対する態度の変化においても一致している。なお、小西三十

郎が戎嶋へ釣りに行って、大名が召抱えに来ることを待つという設定は、太公望の故事だけでなく、『本朝三國志』の小西弥十郎が小磯のいる揚屋で大名加藤正清に召抱えられる場面とも関連している。

一方、『世間狙』一之巻一の後半部分では、小西三十郎が山本勘六に騙される場面は、歌舞伎『女夫星浮名天神』の生玉蓮池の段の徳兵衛が九平次に騙され、九平次を責める展開と類似している。その他、小西三十郎が乗物に残された山本勘六の着替を引き裂く場面は、豫譲の故事だけでなく、『夏祭浪花鑑』の八段目の団七が一寸徳兵衛との友情を象徴する片袖を取り出し、引き裂く場面を意識している。

『世間狙』一之巻一を全体的に見てみれば、「戎嶋」、「大名に召抱えられる」、「罽を立退て、大坂の乳母が方へたより、(中略)小間物のかたげ賣」、「吉右衛門の物まね」、「富十郎がお初徳兵衛」、「着替えずんずんに引き裂く」という設定は、小西三十郎の人物造形に関わる『本朝三國志』、『夏祭浪花鑑』、『女夫星浮名天神』という三つの演劇作品を示唆している。さらに、それらの演劇作品の物語の展開は、『世間狙』一之巻一の物語の展開にも影響を及ぼしている。

注

① 『諸道聴耳世間狙』(『上田秋成全集 第七巻』、平成二年八月二十五日、中央公論社)。

② 今まで『諸道聴耳世間狙』一之巻一に関する先行研究は左記の通りである。

浅野晃「秋成と西鶴」(『文芸研究』第三十三集、昭和三十四年十一月二十日)。

高田衛「上田秋成研究序説」(昭和四十三年六月、寧楽書房)。

森山重雄「上田秋成初期浮世草子評釈」(昭和五十二年四月三十日、国書刊行会)。

森山重雄「上田秋成初期浮世草子評釈」補遺(『人文学報』第一三三号、昭和五十四年三月)。

堤邦彦「諸道聴耳世間狙の構造——世間と伝承——」(『國語と國文學』第六百七十二号、昭和五十五年三月)。

日野龍夫「秋成と時代物浄瑠璃」(『文学』第五十巻第十号、昭和五十七年十月十日、岩波書店)。

神楽岡幼子「諸道聴耳世間狙」の挿絵(『国文学』第七十号、平成五年十二月、関西大学国文学会)。

③ 神楽岡幼子「諸道聴耳世間狙」の挿絵(『国文学』第七十号、平成五年十二月、関西大学国文学会)。

④ 浅野晃「秋成と西鶴」(『文芸研究』第三十三集、昭和三十四年十一月二十日)。

森山重雄「上田秋成初期浮世草子評釈」補遺(『人文学報』第二三三号、昭和五十四年三月)。

日野龍夫「秋成と時代物浄瑠璃」(『文学』第五十巻第十号、昭和五十七年十月十日、岩波書店)。

- ⑤ 『上田秋成全集 第七卷』（平成二年八月二十五日、中央公論社）。
- ⑥ 高田衛『秋成年譜考説』（昭和三十九年十一月、明善堂書店）。
- ⑦ 『本朝三國志』（『近松全集 第一巻』、平成元年八月二十五日、岩波書店。底本（版元大坂山本九兵衛・九右衛門、東洋文庫所蔵本）。
- ⑧ 『諸道聴耳世間狙』（『上田秋成全集 第七巻』、平成二年八月二十五日、中央公論社）による。ただし本文引用に際して、本文中のルビを省略した。以下の引用も基本的に同様である。
- ⑨ 森山重雄『上田秋成初期浮世草子評釈』（昭和五十二年四月三十日、国書刊行会）。
- ⑩ 『夏祭浪花鑑』（日本古典文学大系51『浄瑠璃集 上』、昭和三十五年六月六日、岩波書店。底本（延享二年七月十六日、版元京都正本屋山本九兵衛・大坂山本九右衛門）。
- ⑪ 『夏祭浪花鑑』（日本古典文学大系51『浄瑠璃集 上』、昭和三十五年六月六日、岩波書店。による。底本（延享二年七月十六日、版元京都正本屋山本九兵衛・大坂山本九右衛門）。ただし本文引用に際して、本文中のルビを省略した。
- ⑫ 『曾根崎心中』（『近松全集 第四巻』、昭和六十一年三月二十日、岩波書店。底本（大阪府立中之島図書館所蔵本）。
- ⑬ 土田衛『曾根崎初夢曾我』その他——曾根崎心中劇史——（『考証元禄歌舞伎——様式と展開——』、平成八年六月二十八日、八木書店）。
- ⑭ 『曾根崎模様』（『翻刻『曾根崎模様』（上）』、『同志社国文学』第四十二号、平成七年三月二十日、同志社大学国文学会及び『翻刻『曾根崎模様』（下）』、『同志社国文学』第四十三号、平成八年一月三十日、同志社大学国文学会。底本（版元鱗形屋孫兵衛・西澤九左衛門、京都大学附属図書館所蔵本）。
- ⑮ 以下、傍線は全て引用者による。
- ⑯ 高田衛『上田秋成研究序説』（昭和四十三年六月、寧楽書房）。
- ⑰ 以下、囲み線は全て引用者による。
- ⑱ 『警世通言』第十七卷『鈍秀才一朝交泰』（『三言二拍？ 警世通言』第二巻、昭和六十年八月二十日、ゆまに書房）による。底本（天啓甲子〔寛永元年〕、金陵兼善堂、蓬左文庫所蔵本）。
- ⑲ 『初刻拍案驚奇』卷二十一『錢多處白丁橫帶 運退時刺史當稱』（『三言二拍5 初刻拍案驚奇』第二巻、昭和六十一年九月二十五日、ゆまに書房）による。底本（崇禎戊辰〔寛永五年〕、金閨安少雲、日光山輪王寺慈眼堂所蔵本）。

〔付記〕

本稿は、二〇〇九年度秋季同志社大学国文学会研究発表会（二〇〇九年十一月十五日、於同志社大学弘風館）における口頭発表に基づくものである。会場内外で貴重な御指導や御教示を賜りました方々に、改めて心より御礼を申し上げます。